

高校生物におけるノート指導を通じた生徒指導の実践的研究

佐藤 誠也（岩手県立不来方高等学校）

要約

本研究では、毎日の授業を通して実践できる生徒指導のあり方を探ることを目的とする。その方法として、高校生物の授業において授業後の学習ノートに記入する自己評価とカウンセリングをもとにしたノート指導の実践により、生活習慣や学習姿勢を見直すことが可能なのか、支援過程での生徒の様子や変容、担当者の評価から検証する。

実践の結果、双方向のコミュニケーションを通して自己理解と生徒理解が深まり、教科内容を通して自分の生活の問題点を具体的に追究し、生活習慣の改善を促すことができた。また、その過程を通して学習意欲や学習態度、学習方法への気づきをもたらし、自発的な行動を促すことが明らかになった。

キーワード： 高校生物 ノート指導 生徒指導

1. 研究の背景と目的

激しい社会の変化に伴い、生徒を取り巻く環境の変化や問題行動の状況等から生徒理解の深化を図ることや、生徒と教師の信頼関係を築くことをベースにした生徒指導の充実が求められている。そのためこれからの教科指導は、生徒指導の機能を十分に生かし、生徒一人一人の能力・適性、興味・関心や性格、進路等を踏まえながら指導方法の工夫、改善を重ねながら個に応じた指導、支援の充実を図ることが重要である。

これまでの研究や実践の多くは、生徒指導と学習指導を領域面、機能面で区別したものが多く、学校生活の大半を占める授業を通して、教科や科目をベースにそれぞれの教科内容の特性を生かして生徒指導を実践した研究は少ない。

そこで本研究は、前述した今日的な課題を踏まえ、毎日の授業を中心に教科指導の中でどのような生徒指導が可能なのか、実践し検証することを目的とする。具体的には、高校生物の授業において、授業後の学習ノートに記入する自己評価とカウンセリングをもとにしたノート指導の実践により、生活習慣や学習姿勢に対する気づきがおこり、見直していくといった自発的な行動を促すことが可能なのか、支援過程での生徒の様子や変容、担当者の評価から検証する。

2. 研究方法

岩手県内のある公立高等学校の生物 B の授業を対象におこなった。

1次調査は平成14年10月から11月にかけて、2学年68名を対象にしたアンケート調査と、実践1として2学年A男という生徒を対象にノート指導の実践を試みた。

2次調査は平成15年5月から6月にかけて、実践2として3学年に進級したA男に対してノート指導の継続的支援を試みた。

ノート指導の実践手順は、次の通りである。

(1) 参与観察として対象授業において、フィールドノーツを用いて対象生徒の様子や板書事項など気づいたことを記録する。

(2) 生徒は授業についての自己評価(自由記述式)を学習ノートに記入し、提出する。教師は、自己評価に対してコメント(朱書き)を記入する(ノートを開いて、左ページには板書事項、右ページには生徒の自己評価値と教師からのコメントを記入)。

(3) 昼休み、放課後を利用して学習ノートをもとにカウンセリングを5分から10分間程度おこない、その様子をテープレコーダーで記録する。

3. 結果と考察

(1) アンケート調査

ノートの活用、学習相談や質問、自己評価の3点について選択式及び自由記述式でおこなった。

対象クラス（高校）においては、88パーセントの生徒が毎時間ノートを取り、ノートの記録的機能、再生的機能を重視した活用になっている。

教師に質問、相談しない(しにくい)理由として、全体の50%の生徒は「友達に聞けばわかる」「自分で解決できる」と答え、わからないときの解決方法を自分なりに持っている。しかし残りの50%の生徒は解決できずに、迷いやいらだちが読み取れることから、日常での個々の生徒の内面の把握とその対応のあり方、工夫が急務である。

自己評価の記述量は個人差が大きく、内容はわかった事実の記述にとどまった、抽象的で振り返りの浅い自己評価が多い。疑問やもっと知りたいこと、自分の考えをもとにした自己評価にするためには、個々に対応しての教師の働きかけが必要である(2) ノート指導の実践過程と生徒の変容

(実践1) 生徒理解と自己理解を重点において実践した。ノートを通したコミュニケーションから、教師は生徒理解が深まり、生徒は自己理解をはかりながら、学習方法、学習姿勢に対する気づきが生えていった。特に部活動ノートの導入により見方や考え方の幅の広がりが見られ、部活動からの振り返りは生物(教科)へのフィードバックが可能であることがA男の指導を通しての自己評価から読み取ることができた。

しかし課題として「生物を暗記科目ととらえ、授業での知識的理解が日常の生活経験体験と結びついて考えることができないため、学ぶ意味価値をもてない」ことが明らかとなった。

そこで、これらの課題を克服するために、日常の生活体験の中で生徒の興味、関心あることと生物との関連、生物の内容を広く捉え、他の教科(分野)とのリンクと活用の2点を支援の重点として実践2で試みた。

(実践2) 単元「植物群落の分布」では、部活動の野球で使用する「木製バット」に注目し、バットの材質を調べる過程で、「属や科」といった分類や、別名などを自分で調べ、知ることにより関心を高め、授業と生活の関わりを認識するきっかけとなった。

また、授業中に眠くなる原因を、部活動の疲れをとることから展開することにより、運動の量や質に注目し、実際に心拍数を測定したり、有酸素運動について触れるなど、保健体育の内容も活用しながら

部活動と教科そして生活とのつながりを認識できた。

単元「生態系」では、「疲れと栄養素の関係を考えていこう」という自らの意志のもと、家庭科の内容を活用しながら食事と栄養素、トレーニングと筋肉、睡眠とホルモンの関係などを自発的に学び、自分の生活の仕方に対する気づきと見直し、最後には学習時間や学習方法の工夫や改善のため行動をおこしていった。

(3) 学習意欲と学習態度の変化

実践での支援過程や生徒の変容、担当者からの評価から検証した。学習意欲については、当面の授業の課題に対する興味を喚起するだけでは短期的には改善されたことになるが、持続性がない。そこで、学習の目的のつかみ方(学習観)が重要である。具体的には現在の学習に対し、どんな意義をもって望んだか、また自己の変化に期待をかけるような態度がみられたのかを把握することである。

自分のなかに興味、関心、好奇心を呼び起こし期待を持たせることができれば、生徒は自ら多くの心的努力を払って課題を見つけ取り組んでいった。よって、単元の初めの段階で、これから学ぶことの重要性や難しくても努力すればわかるという可能性を意識させることが重要である。興味、関心、好奇心を自分の中に見つけ、それが何に起因しているのか意識させる事によって、学習の意義をつかむ事ができたといえる。

4. 結論

高校生物において、ノート指導を通した生徒指導は、双方向のコミュニケーションを通して自己理解と生徒理解が深まり、教科内容を通して自分の生活の問題点を具体的に追究し、生活習慣の改善を促すことができた。また、その過程を通して学習意欲や学習態度、学習方法への気づきをもたらし、自発的な行動を促すことが明らかになった。

よって教科指導からの生徒指導は有効である。

5. 今後の課題

より多くの生徒の実践事例を積み重ねること。今必要なこと、知りたいことは「何をすべきか？」に対するトップダウン式のアイデアやシステムの提案ではなく、「具体的にどうしたらそのアイデアを実行に移すことができるのか」である。